

遊びのチカラ
アクティブ・
チャイルド・
プログラム

モデル団体

『東山スポーツ少年団（名古屋市：剣道）』

剣道の“守・破・離”の訓えと ACPの融合によって導かれていく 「子どもたちは確実に成長している」 という実感！



▲〈3色団子オニ〉赤・黄・緑のマーカーを用意し、同色マーカーを頭に載せた3人が一組で座った状態で、ゲームはスタート。オニに追われる子どもがタッチされずにいずれかの3人組の端にくっつく。すると逆の端の1人が押し出されて逃げる。オニにタッチされることなくまた別の3人組の端にくっつくという形でゲームが進み、赤・黄・緑の3人組になったら勝ち抜ける、というルール。制限時間内で3色になれなかったグループは、腕立て伏せ！

「11月最終週からは防具を着けるんです」と、松井満男団長が凛々しくなった新入団員たちを見やる。道着もすっきり肌になじみ、熱気でむせ返る夏の道場での稽古も乗り越えた少女剣士たちの裸足に、床の冷たさがしみ始めた秋。春から導入したアクティブ・チャイルド・プログラム（ACP）も、実りの時期を迎えていた。

試して、失敗して、成長する

いつものように礼と黙想の後、指名された子どもの大きな掛け声に沿って、準備体操が進む。そして始まる、遊びの時間。これまで松井団長や指導員の吉田繁敬先生が先導していたこの30分間を、今日は中学生のジュニア・リーダーたちが代わってまとめ上げるという。「すでに2部（小学5〜6年）は

中学生のリーダーたちに任せているんです。今日は初めて、1部（幼稚園児〜小学4年）の子どもたちを相手に務めてもらおうと。きつとこの年齢の大人数をうまく誘導して、時間内に完了させるのは難しいと感じると思いますよ」

日本スポーツ少年団リーダー養成ワーキンググループの班員でもある吉田先生は、そう言って遠巻きに子どもたちの動きを見守る。

今日の遊びは3色団子オニ。子どもたちをリードするのは大好舞依さん。冷静で、芯の強さを漂わせる中学生だが、実は「とても緊張していました」と告白する。赤・黄・緑のマーカーを3人組の子どもたちの頭に載せて、開始の号令。3色揃った勝ち組を豊に誘導し、どの子もまんべんなく参加できるように、時間配分にも気を配る。

「まず、私が1部の子たちの前でやっていることをリーダーに見せて、同じことを2部の子たちを相手に実践するチャンスを与えるんです。最初から、自分たちでやってみなさい」と言っても、それは無理。ティーチングがあつてのコーチングです。教えられたことを試して、失敗して、もっと知識や技術がほしいと思わせる、という仕掛け。私たちの団におけるACPの導入は、剣道の世界でいう「守・破・離」に沿って進めているんです。今回は、「破」の部分です」

剣の道30余年の吉田先生が、種明かしをする。

「守・破・離」という仕掛け

守・破・離とは、武道や芸事など日本の伝統文化の伝承・発展の根底にある思想。まずは師からの教え

アクティブ・チャイルド・プログラムの内容については、日本体育協会のホームページからご覧になれます。

→<http://www.japan-sports.or.jp/> (トップページ右側「PICKUP」内のバナーをクリックしてください)

■ 同プログラムについては、コーチング・クリニック誌(ベースボール・マガジン社刊)でも連載中です。



いつも先生が1部の子どもたちを盛り上げているのを見て、自分もそうできればいいなあと思っていました。今日は70～80点くらいかな。



▲2部の高学年の子どもたちの「遊び」を担当した赤塚翔くん。楽しませていても、しっかりとまとめられている吉田先生やシニア・リーダーの鈴木陽太さんに憧れているという



うまくできたと思います。みんなから慕われる、優しいリーダーになりたいです。そして将来は小学校の先生になりたいです。



▲この日、1部の子どもたちの遊びを担当したのはジュニア・リーダーの大好舞依さん。「最初は緊張しました」と言うリーダーだが、子どもたちには好評。「楽しい。自分もあんなふうに優しいリーダーになりたい」と口をそろえる



▲すっかり凛々しくなり、物おじしない新入団員たち。11月最終週からはついに防具も着ける。もう名札代わりの鉢巻きも卒業だ



▶子どもたちの動きを遠巻きに見守る吉田先生。これまで教えてきたことを、子どもたちがどう自分たちのものになっているかを見ている



▶準備体操はその場で指名された子どもの掛け声で進められる。先生の指導がなくても、もうしっかりと自分たちでからだをほぐすことができる



▶遊んだ後はしっかりと練習。継続団員の相手を務めるのも、リーダーたちの役割のひとつ。東山スポーツ少年団は、ジュニア・リーダー、シニア・リーダーたちの活躍の場としても非常によく機能している

「活躍するジュニア・リーダーさん」

東山スポーツ少年団恒例の夏季キャンプ(8月25～26日)では、幼稚園児から大学生まで総勢60名で御岳休暇村を訪れた。毎年シニア・リーダー、ジュニア・リーダーたちがバス内でのレクリエーションから企画して盛り上げるキャンプだが、ACPを取り入れた今年は、現地に到着して広場に出るとすぐに、自然発生的に子どもたちが「遊び」を始める光景が見られたという。



最終回となる今回は、東山の子どもたちが自らの殻を破り、「離れ」ていく様子を記録したい。

最終回となる今回は、東山の子どもたちが自らの殻を破り、「離れ」ていく様子を記録したい。

「見事な間接的指導が行われていると思います。破って、いくためには、目を掛け、手を掛けなければいけない。直接的な言葉で指示するのは簡単ですが、それでは子どもは、破って、いくチャンスがありません」と言うのは、小学校教諭の経験を持つ岐阜聖徳学園大学の佐藤善人先生だ。

からだを動かすことや人と協調することが自ずとできる子どもを育てるには、ACPを「守る」だけでは足りない。「破る」ことによって達成され、「離れる」ことによってさらに発展する。

や型を守り、それを修行するなかで自分に合った形へと発展させ、最終的には守にも破にもとらわれない独自の境地へ至ること、とされる。

東山スポーツ少年団のACP活動に照らすと、まずは先生方から教えられた遊びを子どもたちはしっかりと修得する。リーダーたちは先生方がいかに子どもたちを動かしているか、楽しませているかを学ぶ。これまでにリポートしてきた、そんな「守」の段階を経て、いまは「破」。子どもたちは先生方から教わった遊びを自発的に行い、リーダーたちは指導を実践することで改善策を考える。

【SJ】